

《学界時評》

## 国際ワークシヨップ「Old Icelandic Text in Medieval Northern Europe」を終えて

——ワークシヨップの記録と今後——

小澤 実

去る二〇一三年十一月二十五日（月）の午後、立教大学池袋キャンパス地下第一会議室において、「中世北ヨーロッパにおける古アイスランド語テキスト」(Old Icelandic Text in Medieval Northern Europe)と題した国際ワークシヨップが開催された。深津行徳日本学研究所所長を受け入れ教員として来日したアイスランド大学教授ヨーン・カール・ヘルガソン (Jón Karl Helgason) を交え、八人の報告者による、日本で初めての中世アイスランドの専門的国際会議である。本稿は、当該ワークシヨップに至るプロセスと概要を伝えるとともに、こうした会議を通じて、今後海外で日本学をすすめている研究者とどのように関係を接続していくべきかに対する事例の提示を目的とする。

## 1. ヨーン・カール・ヘルガソン教授の来日にいたる経緯

ヨーン・カール・ヘルガソン教授（以後、ヨーン・カール教授と略称する。アイスランド人は、一部の家系を除いて名字を持たず、個人名と父称によって個人を特定する。つまりヨーン・カール・ヘルガソンは、ヘルギの息子ヨーン・カールという意味）は、一九六五年にアイスランドに生まれ、現在アイスランド大学アイスランド文化・比較文化学部の教授職をつとめている。アイスランドの中世文学であるサガを専門とし、いまや当該分野の基本研究書としての地位を得ている『ニヤールのサガを書き換える』で博士号を取得した。その後、サガ文学だけではなく、

文化受容や翻訳理論、中世文学と現代文学の比較について研究範囲を広げ、アイスランド語と英語双方で多数の研究業績をあげている。紙媒体の仕事にとどまらず、「ウィキサガ」(Wikisaga)と題したウェブ上でサガ・テキストのハイパーリンク辞典作成にも取り組んでいる。現在を代表するアイスランド文学研究者の一人といつて差し支えない。

今をさかのぼる二〇一二年十一月、ヨーン・カール教授は、筆者がその会員のひとりであるバルト・スカンディナヴィア研究会の公式アドレスへメールでコンタクトを求めてきた。アイスランドと日本の交流のために設置された渡辺信託基金に応募するために、日本側の受け入れ機関が必要となったからである。当初、スカンディナヴィア中世史を専攻し、なおかつ常勤先を持つ数少ない会員であった筆者が受け入れ教員となる予定であったが、基金への書類提出の期限が差し迫っていたため、文学部教授会での手続きでは到底間に合わないという状況であった。ヨーン・カール教授が基金に提出した研究計画は、従来の専門である中世サガそれ自体の研究ではなく、日本文化におけるサガならびに韻文であるエッダの受容や表象のありかたであった点に注目した筆者は、日本学研究所所長で深津教授に相談し、彼を受け入れ教員として、研究所客員研究員の資格を英文文書で即時発行していただいた。そのおかげで、ヨーン・カール教授は無事に書類一式を基金に提出することが可能となり、来日が可能となったのである。

ヨーン・カール教授は、十一月二十三日から十二月六日までの二週間弱日本に滞在した。その間、後に述べるアイスランド中世研究関係の企画をこなすとともに、前記の計画に基づく、日本研究のための基礎調査に従事した。そのうちわけは三点である。第一に『ヴィンランドサガ』の著者幸村誠氏へのインタビューである。『ヴィンランドサガ』は、当初『週刊少年マガジン』誌に、その後『アフタヌーン』誌に連載され、現在単行本で十三巻まで刊行されている漫画である。紀元千年前後の北欧世界を舞台に、アイスランド出身の主人公の人生と内面の成長を描く一種のビルドゥングスロマンであるが、人物描写のみならず背景描写なども良くできているために、海外でも人気が高い。ヨーン・カール教授は本作品を日本における中世北欧受容の最も顕著な例のひとつと見なし、著者へのインタビューを通じてその発想や描写の源泉を調査したようである。第二に、京都精華大学マンガ学部スタッフとのディスカッションと付属マンガ図書館での調査である。日本発のマンガ学部をもつ当大学は、日本人研究者の他に外国籍を持つ複数の専門家を擁し、なおかつ膨大な資料を図書館に排架している。近々、明治大学でも類似の図書館が開館される予定であるが、京都という伝統的日本文化を体現する地での調査は、教授に深い印象を与えたようである。第三に、神奈川大学外国語学部国際文化交流学科のステファン・ブッヘンベルグ准教授に招かれての報告である。ブッヘンベルグ准教授とは国際会議などで長年の交友関係を築いてきたヨーン・カール教授は、十二月四日に当大学人文学研究所のセミナーにおいて「エッダとサガの分岐路」(The Forking Paths of Eddas and Sagas) というタイトルで講演を行った。筆者も参加した本講演は、『ヴィンランドサガ』も含めた近代世界における北欧中世文学の受容史で、参加者の関心にしたがった様々な観点からの質問がなされた。

滞在中の調査を通じて、ヨーン・カール教授は十分な研究データを得てきたようである。彼は現在英文で中世北欧的要素の近代世界における受容を論じる大著を準備しているが、そのうちの一章は日本に宛てられる予定である。これは財団からの資金援助だけではなく日本学研究所の受け入れなくては不可能であったプロジェクトである。

## 2. 国際ワークショップ

### 「Old Icelandic Text in Medieval Northern Europe」

ヨーン・カール教授の来日が決定したとき、当初は日本研究にかかわる講演をお願いする心づもりであった。しかし初来日となる教授は、今回の滞在中の調査に基づき日本における中世北欧文化の受容に関する論考を仕上げるのが可能となるため、それは後日の課題とし、彼の従来の研究テーマに基づく企画をお願いする方針へと代えた。

ここで筆者が重視したのは、一方向的な講演ではなく、日本側からも彼ら専門家のメリットになる企画を立てることであった。具体的には、筆者の経験と近年の国際交流の流れを鑑みて、三点を念頭に置いた。第一に、双方が個別報告をなし、両者にとって最大公約数としての共通言語である英語で議論をすることである。たしかに、しばしば行われているように、海外研究者を招聘して最前線の研究成果を講演してもらうことに意義なしとはしない。しかしながら、彼ら海外研究者にとっても、日本人研究者がどのような水準で「自国」研究をおこなっているのかには関心があるし、そもそも世界の学問共同体は、各国ごとに母語で分断されているわけではなく、共通するテーマの解明を目的としているはずである。そうであるならば、意思疎通の若干の齟齬には目をつむったとしても、史料を提示し論証を追うことのできるペーパーというたたき台を提示し、それについて議論をするのが双方にとってメリットがあるし、

今後進めるべき方向であると考ええる。その際に英語を用いるかどうかという点については議論のあるところだが、結局アカデミアにおいて現段階で最も多くの理解者を得るのは英語であるという厳然たる事実がある以上、さしあたりは英語で良いと考えている。

第二に、成果を英語・日本語双方で刊行することである。会議に参加しなかった研究者にとつても利用可能なたちにとって報告全体を刊行することは不可欠であるが、第一の観点にのっとるならば、英語だけで良いとする判断をとることも可能かもしれない。しかしながら外国研究は、当該国の学会を中心とする世界共通のアカデミアに参加するという条件とともに、母語によるアカデミアにも寄与するという二重の拘束がある。とりわけ母語を同じくする他分野の研究者は、あえて外国語で直接の専門から離れた研究成果を読もうとはしないだろう。中世アイスランド史研究であるならば、アイスランドを中心とする欧米学界には英語でアピールすることができ、比較事例として日本の西洋史学界さらには日本史や東洋史を含めた歴史学界に貢献するためには、専門家の集う欧米学界よりも前提を丁寧に説明したかたちで、日本語で提示する必要があるということである。そうであるとするならば、日本の読者に向けて、日本語として成果を刊行することも、成果の認知のためには必要なことである。

第三に、若手育成を図ることある。筆者は、近年の早期業績主義に与するものではなく、むしろそのような潮流は、多言語の習得や研究蓄積の消化に膨大な時間を必要とする前近代世界の研究には弊害が大きく、なおかつ相対的には近代研究との間に様々な不公平を生み出す可能性があると考ええる立場にある。さはいえ、学術振興会特別研究員をはじめとする(とりわけ)若手向け資金の獲得にとっては、研究計画・研究業績・学位の有無が、これまで以上に問題とされるようになっており、この流

れが逆流することは考えにくい。そうであるならば、今自らがおかれた現状を受けとめ、若手外国研究者のために、留学経験の無いまだ若い段階にあっても海外研究者との交流を促し、国際会議での報告経験を積み、ジュニアセッションという相対的に低いハードルを設定して、そこで経験を積んでもらうべきではないかと考えた。

以上を踏まえて筆者は、今後日本の中世アイスランド研究を担うであろう若手研究者に声をかけ、「中世北ヨーロッパにおける古アイスランド語テキスト」というタイトルを設定した。最初に、一人あたり十五分を割り当てた修士学生による研究経過報告 (Work in Progress) (司会者小澤実) では、元根典子「王族聖人及び王族への崇敬 中世ノルウェーでの聖オーラヴの一例」(The Cult of Royal Saint and the Veneration of Royalty: The Case of St. Olav in Medieval Norway) と水野志保「19世紀イギリスにおけるアイスランドへの関心」(British Interest in Iceland in Nineteenth Century) が報告された。実証研究ではなく修士論文の方向性の確認であったが、ヨーン・カール教授をはじめとする専門家から適切な助言や文献情報なども得られ、次のステップに進むための足がかりを得ることができたのではないかと思う。

しかるのち、一人あたり三十分を割く本論へと移行した。第一セッション「アイスランド初期社会への視線」(司会者松本涼) は、和田忍「アングロ・サクソン期のイングランドにおけるゲルマン民族的信仰と慣習の痕跡について 古英語と古アイスランド語文献の比較から」(Traces of Germanic Paganism and Custom in Anglo-Saxon England in Comparison of Old English and Old Icelandic) と小澤実「アイスランドにルーン石碑は建立されたか。歴史学的解釈の試み」(Were Rune Stones Raised in Iceland? An Attempt at Historical Interpretation)・第二セッション「中世アイスランド語テキストの著者性」(司会者伊藤盡) は成

川岳大「なぜアイスランド人は北欧の王位継承紛争において、王位請求者の主張を支持する記述を残すようになったか? 十二世紀スカンディナヴィア史とノルド語歴史記述の勃興」(Why the Icelandic 'Author' was Interested in the Legitimacy of Throne Claimants during Norwegian Civil War?: The Evolution of Norse-Icelandic Historical Writing in the Light of 12th Century Scandinavia) ヨーン・カール・ヘルガンン『イムスクリングラ』を書いたのは誰か: 作品と著者の複雑な関係」(The Distributed Authorship of *Heimskringla*)、第三セッション「記録、記憶、神話」(司会者ヨーン・カール・ヘルガンン)は松本涼「アイスランドの『建国神話』: ハーラル美髪王の王政と植民」(A 'Foundation Myth' of Iceland—Reflections on the Tradition of Harald hárfagri's Tyranny)と伊藤盡「テッラの息子ブーリとヨルズの息子ソール: 北欧神話の大地母神より生まれし神: 再訪」(*Búri* as *deus terra editus* and *Pórr* as *Iar dar Burr*: The Earth-born Gods in the Scandinavian Mythology Revisited) から構成されていた。平日の月曜日午後という時間帯のため参加者はさほど多くなかったが、いずれのセッションも、報告者のプレゼンテーション後に、英語による質疑応答をおこなった。修士学生と筆者を除き、報告者のいずれも海外で英語で修士号を取得していたため、ディスカッションは高度なレベルで十分に機能していたと言える。

なおこのワークショップでは、遠方より招聘した三名の研究者のうち個人研究費の支出が困難な若手二名については、筆者が代表をつとめる二〇一三年度科学研究費(若手研究A)「スカンディナヴィアとその影響圏におけるルーン石碑の総合研究」(25704012)より旅費と滞在費を支給した。ルーン石碑の実証研究の深化をはかる本科研の成果の一部となる筆者の個別報告のためにも、このような専門家による議論の場を用

意できたことは有益であった。なお本ワークショップは、本科研究費の成果報告の一部として、英文報告書のかたちをとり関係者に配布されることになるだろう。

十一月二十九日(金)の午後四時半より、ヨーン・カール教授は、日本で数少ない中世アイスランドの専門家、松本涼氏ならびに京都大学大学院文学研究科服部良久教授が主催するセミナーの協力を得て、京都大学においても講演会を開催することが可能となった。筆者自身は参加できなかったが、「近代のハイパーテキストとしての中世サガ」(Medieval Saga as Modern Hypertexts)と題された報告では、ニヤールのサガの近代における受容という、ヨーン・カール氏自身の研究成果の一部を披露した、と聞いている。過去に中世アイスランドの専門家が訪日講演したことは皆無ではないが、今回のように、アイスランド専門家以外にも開かれた機会はほとんどなかったのではないだろうか。そういった意味では、今回のヨーン・カール教授の来日が、中世アイスランド・スカンディナヴィア研究にとってひとつの里程碑になればと思う。

### 3. 今後

今回の来日を通じてヨーン・カール教授は、筆者を含め、日本人研究者と今後も共同研究を進めることを承諾してくれた。そのため筆者によって今後予定されている二つの企画にも寄稿を依頼することが可能となった。ひとつは、このたび開催した国際ワークショップの報告のうちいくつか邦語北欧研究専門誌『北欧史研究』に掲載する企画である。ワークショップ報告者のうち、和田、小澤、成川、松本にくわえ、ヨーン・カール教授を含めた五人の論文による特集である。筆者はかつて同雑誌上で、成川、松本、そして北欧文学研究者の中丸禎子(東京理科大学)とともに、「中世アイスランド史学の新展開」と題した特集を企画し、



研究動向、書評、文献目録を通じて、中世アイスランド研究の現状を日本に紹介した。今回の企画はその姉妹編であるとともに、発展編である。つまり現地の研究の紹介ではなく、史料に基づくオリジナルの論文による特集である。ヨーン・カール教授は帰国後直ちに報告原稿を増補改訂し送付してくださった。もうひとつは、筆者が編者の一人をつとめる『アイスランド・グリーンランド・北極を知るための60章』への寄稿である。本書は日本で初めてのアイスランドを含めた北ヨーロッパ世界を紹介する書物であり、第五部をアイスランドと日本の関係にあてる予定である。そのなかでヨーン・カール教授は、「アイスランド文学者の見た日本」という項目を執筆することを了承してくれた。また、筆者だけではなく、ワークショップ報告者のうち別の人たちとも、今後いくつかのプロジェクトを計画中であると聞いている。彼が日本学研究者として再来日する機会もおそらくあるだろう。

ヨーン・カール教授の滞在は短期的で、今回は日本学それじたいに寄与することはなかった。しかしながらいづれ北欧受容研究の基本書となるであろう著作の基礎調査を、立教大学日本学研究所客員研究員という立場で遂行できたこと、そして日本における研究者との関係を構築し日本での刊行物に寄稿を応諾してくれたことは、彼自身だけではなく、日本学研究所の今後にとっても有意義なことではないかと思われる。本学の文学科ドイツ文学専修が積極的に進めているように、各国の大学の日本語学科と提携し、相互交流を図るというのはもともと効率の良いやりかたであるが、ヨーン・カール教授のように、そのような組織が所属研究組織に存在しないにもかかわらず日本学に関心のある研究者は数多く存在するように思われる。本学の日本学研究所の主目的のひとつが「海外の日本学研究との連携を図り、立教大学を媒体として質・量ともに豊かな研究を推進する」（日本学研究所HPより）ことであるとするとするなら

ば、彼のような研究者を積極的に受け入れ、研究交流を積み重ねながら、十年後、二十年後に成果が実るような息の長い関係を築いておくことも大切なことではないかと思われる。

#### 【付録：ワークショッププレジューメ】

#### 《研究経過報告 (Work in Progress)》

王族聖人及び王族への崇敬 中世ノルウェーでの聖オーラヴの一例

元根範子（京都大学）

中世ヨーロッパにおいて、キリスト教を受容した王国には「王族聖人」という存在が存在する。彼らは国内でのキリスト教布教もしくは改宗活動を行い死後に列聖されて崇敬の対象となっている。「王族聖人」はキリスト教の普及が遅れた地域、いわゆるヨーロッパの辺境と呼ばれる地域に多く見られ、宗教的な崇敬の対象や政治的な表象として利用された。スカンディナヴィアにも王族聖人は存在し、異教を廃しキリスト教を導入し死後に列聖されている。大抵の王族聖人は列聖行為に由来するサンクティティ（聖性）を持っている。一方、ゲルマン民族系国家の王族はサンクティティのほかにサクラリティも持っている。これは異教の神の系譜であることを通して王の血に宿る聖性である。これについてはM・ブロックや青山吉信、W・A・チェイニーなどが議論を行っている。サンクティティとサクラリティの間には違いがあり、普通聖人はサクラリ

テイのみを保持する。しかしスカンディナヴィアの王族聖人は両方を持つている。彼らはキリスト教徒であると同時にサガやスカルド詩で語られるオーディンやフレイなどの異教の神の後継者であるからだ。国王の起源が神であることは『ユングリングサガ』『ユングリングタル』『デンマーク人の事績』などに詳しい。二つの特性を持つスカンディナヴィアの王族聖人については珍しい事例として注目すべきであると考ええる。

研究にあたっては「どのように王族崇敬や国王聖人崇敬が形成され、それが教会や政治でどのように利用されたのか」という大きな問いを設定した。だが、現在の自分にとって大きすぎる問いであるために、当面はスカンディナヴィアの一地域であるノルウェーに地域を限定して研究を行う。中世のノルウェーには複数の王族聖人が存在し、その中で最も有名なのが聖オーラヴ、つまりオーラヴ二世である。彼に関する史料は中世スカンディナヴィアの王族聖人の中でも比較的多いため、史料収集の容易さという点でもノルウェーを研究の起点とした。

主に使用する一次史料は“*Passio et miracula beati Olavi*”と“*Den store saga om Olav den hellige*”の二つである。前者はいわゆる聖人伝でありラテン語で記述されている。作者はニザロス大司教のエイステイン・エルレンドソンと言われているが不明である。二〇〇一年に英訳されているものがあるため、適宜これを参照する。一方後者は古ノルド語で記述されたサガである。作者はスノッリ・ストウルルソンで、彼が『ヘイムスクリングラ』を書く以前に書いたものであるといわれており、序文や本文中にも共通性が見られる。しかし、相違もあり、おそらくスノッリが『ヘイムスクリングラ』を書く際に使用した原資料に近いものであると考えられるため『ヘイムスクリングラ』ではなく、あえてこちらを史料として選択した。これらの史料には共通する奇跡譚が含まれている。しかし二つの史料は成立年代も目的も違う。私は歴史的事実と史料に記

述された内容を比較し、オーラヴ二世の言及の方法、利用の方法を見いだせるのではないかと考えている。

また、スカルド詩も一次史料として有用である。詩はサガなどの散文に比べて原型が保たれやすいという特性があるため、オーラヴ二世と同時代の人間が国王や有力者たちに抱いていた概念を知るために使用したい。

研究文献に関して、王族聖人に関する研究ではテューリンゲンの聖エールージェベトに関する三浦麻美(二〇〇三、二〇〇九、二〇一二)、チェコの聖ヴァーツラフに関する藤井真生(二〇一二)を参考にしたい。これらの研究では史料として聖人伝を使用しており、聖人伝の形成過程や聖人の政治的・宗教的利用について言及している。外国語のものではG・クラニツァイの著作でヨーロッパの王族聖人のタイプが分類されている。クラニツァイは十世紀までの王族聖人(修道士のような生活を送り、最終的に殉教する)と十一世紀以降の王族聖人(殉教はせず、キリスト教的君主として平和を創出し、教会や聖職者を支援する)で違いがあると主張している。クラニツァイの主張はヨーロッパの一地域であるスカンディナヴィアにも当てはまると考えられる。よって北欧の王族聖人がどのような存在であるかを考える一つの糸口として彼の主張を参考にする。

一方、ノルウェーやスカンディナヴィアの王族崇敬に関する研究は見つけられていない。しかし、アングロサクソン期のイングランドにおける王族崇敬と取り扱った指珠恵(一九九二)、石本麻里(二〇〇〇)は有用である。これらの論文ではキリスト教に改宗し異教が蔓延る国内にキリスト教を受容させ、殉教もしくは政的騒乱で殺害された国王たちに對する崇敬意識の形成過程について論じられている。この点に着目し、同じように異教時代のノルウェーを改宗し、王位をめぐる争いで殺され

たオーラヴ二世のケースに当てはめて北欧での王族崇敬の形成過程を理解したい。

### 十九世紀イギリスにおけるアイスランドへの関心

水野志保（立教大学）

オリエントへ関心が高まりつつあった十九世紀という時代に、北欧特にアイスランドへはどういった関心が向いていたのかを見ていきたい。ここではウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）を中心にアイスランド興味を見ていく。

日本においてはアーツアンドクラフツ運動の祖として知られるウィリアム・モリスはデザイナー、クラフツマン、詩人、社会主義者であり、また北欧神話の翻訳者でもあった。モリスは一八七一年と一八七四年にアイスランドを訪れていて、一八七一年の旅については日誌という形で残されている。彼がアイスランドに興味を持ったのはオックスフォード大学時代に北欧神話を読んだのがきっかけであった。そしてその舞台を自分の目で見えるためにアイスランドを訪れたのである。これは旅行に行く前の一八七一年五月十日付けの手紙の中に表れている。モリスのアイスランドへの興味は旅行だけで終わるのではなく、旅行以後もアイスランド人の学者であるエイリーク・マグヌッソン（Eiríkur Magnússon, 1833-1913）と共にサガやエッダを共訳し、出版もした程であった。しかし旅行前の手紙の中にもあるように、彼の周辺ではアイスランドへ関心を抱く者は少なかった。ラファエル前派に含まれるバーン・ジョーンズ（Sir Edward Coley Burne-Jones, 1833-1898）はじめ、ロセッティ（Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882）その他の友人たちはモリスのアイ

スランド熱をなかば、揶揄して面白がり、アイスランドは寒くて冷たい国で文学も野蛮であると決めつけていたのである。

イギリスにおけるアイスランドへの興味は北方ルネサンス以来、徐々に高まってきた。しかし人々が実際にアイスランドへ訪れるようになったのは十八世紀後半からであった。この時はまだ、探検または実地調査的な目的で訪れていた。しかし十九世紀後半からはアイスランドへの関心が徐々に変わっていくのである。

そして十九世紀後半にはアイスランドへの旅は、当時のヴィクトリア朝の教養人の間では一つのブームにまでなり、当時のいわゆる「僻地」への探検ブームと相まって、アイスランドは文学者、考古学者、歴史家、文法学者、言語学者、博物学者などが刺激を得た場所であった。そしてモリスがアイスランドへ旅する時には、釣りや奇異なアイスランドの景観に関心を示した観光客もアイスランドを訪れるようになっていたのである。

### 《第一セッション》 アイスランド初期社会への視線 (Gaze at Early Society in Iceland)

アングロ・サクソン期のイングランドにおけるゲルマン民族的信仰と慣習の痕跡について：古英語と古アイスランド語文献の比較から

和田 忍（中央大学）

アルフリッチによって古英語で作成された説教のひとつである「異教の神々について」はアイスランドに現存している写本に古アイスランド語で翻訳されている。古アイスランド語翻訳の「異教の神々について」

にはゲルマン的異教の神々に関する内容を含んでいるが、古アイスランド語におけるその内容はアルフリッチによる古英語の原典で述べられているほど、ゲルマン的異教の神々を強く批判しているわけではないように受け取れる。そこで、古英語テキストと古アイスランド語テキストとの言語比較を通じて、ゲルマン的異教とはどのような解釈ができるのかを示す。そして、なぜアイスランドにこの古英語による説教集の一部が翻訳されたのか、という理由もあわせて考えることとする。

アルフリッチの説教は西暦一〇〇〇年頃にイングランドで作成されたと言われている。今回扱う「異教の神々について」(De falsis diis)の章ではゲルマン的異教の批判をすることで、イングランド国民に対してのみならず、移住してきたデーン人に対してもキリスト教の信仰を一層堅固にする狙いがあったと思われる。そのテキストがアイスランドへ渡り、アイスランド語に翻訳された理由のひとつとして、ゲルマン的異教(信仰)にまつわる内容はアイスランド国民になじみが深く、このテキストをうまく利用することで、キリスト教の布教に役立つと判断されたためと考えられる。その古アイスランド語翻訳テキストに関して、部分的に古英語原典テキストのパラフレーズ(内容に基づく書き換え)を行うということ以上にその内容の変更、またはその省略を行っていると思受けられる。ではなぜ、このような書き換え、または省略がなされたのだろうか。この問題点に関して、アルフリッチ説教の古英語原典テキストの該当箇所を四点ほど取り上げ、その箇所とその部分に対応する古アイスランド語翻訳テキストとの比較を行う。

上記四点における箇所を考察すると、やはり「異教の神々について」の古アイスランド語翻訳テキストの一部は古英語の原典ほどゲルマン的異教を批判する内容になっていないと考えられる。そして、その理由は、アイスランドにおけるキリスト教への改宗があっても、ゲルマン的異教

信仰が歴史的に存在していたことをアイスランド民族のアイデンティティとみなして、その証拠を残したかったからと考えられる。また、キリスト教化に伴うゲルマン的異教信仰との対立は古アイスランド語文献に豊富に残されているが、それはゲルマン語文化圏に少なからず共通する経験として文献・資料の寡少な地域にも応用して考察できるのではないだろうか。

アイスランドにルーン石碑は建立されたか…歴史学的解釈の試み

小澤 実(立教大学)

ヴァイキングが北ヨーロッパに拡大した紀元千年前後、スカンディナヴィア本土では、現存するだけで三千基にも達するルーン石碑が建立された。「XがYを記念してこの石を立てた」という定型句を持つこの死者記念碑は、実のところ、本土だけではなく、ヴァイキングが拡大したブリテン諸島やロシアにおいても建立された痕跡を残している。スカンディナヴィアとその影響圏で見出されるルーン石碑の建立慣習は、スカンディナヴィア人特有の死者記念文化ということができるかもしれない。他方で、九世紀後半に本土から大量移民のはじまったアイスランドにおいてこの石碑は発見されていない。そもそもアイスランドでルーンが確認できるのは十三世紀以降である。おなじ拡大圏でありながら、なぜアイスランドにはルーン石碑の痕跡を確認することができないのだろうか？

石材の入手、ルーン彫り師の招聘、キリスト教の導入といった問題も議論の俎上に載せうるかもしれないが、今回われわれはその根拠を紀元千年前後のアイスランド社会の特殊性とルーン石碑の建立条件の間に見出してみたい。ここで問題となるのはルーン石碑の機能は複合的である



点である。第一に死者記念碑であるが、第二の機能として、ビルギット・ソーヤーが論じた土地に代表される権利の確認である。つまり紀元千年前後はヴァイキング活動によって大量死の時代となったが故に、故郷における土地の所有者を共同体内に公示するために、石碑の建立者と非建立者との関係（たとえば親子、夫婦、友人など）を明示したのである。加えて第三の機能として、わたしが主張する政治的表徴を挙げることができる。ルーン石碑は、そこに投資するリソース次第で、ルーンテキストのみならず、その石の形状や大きさ、背景図像などに差をつけることが可能である。つまり、リソースに余裕のある有力者は他を圧倒する立派な石碑を作製させ、周囲の石碑と差異化することで、石碑に自らの地位を反映することが可能であったと考えられる。

紀元千年前後のアイスランド社会は、このような機能を持つルーン石碑が機能しうる空間であったと言うことはできるのだろうか。先取りして言うならば、紀元千年前後のアイスランドは、同時代のスカンディナヴィアとは大きく異なる社会構造をもっていたため、かならずしもルーン石碑が十全に機能する空間ではなかった。第一に、必ずしも一部の有力者に富の集中する階層化された社会ではなかったことがあげられる。オッリ・ヴェーステインソンが述べるように、十三世紀のアイスランドは、「自由共和国」*Þjóðveldi*（という）とばかりイメージされるような権利や財産のフラットな自由農民によって構成される社会ではなく、他のスカンディナヴィアがそうであるように、階層化された社会であった。しかしそのような社会へと移行がはじまるのはおよそ一一〇〇年頃からである。それ以前は、移住者たちがアイスランド各地の農場に散居し、競争することの相対的に少ない社会であったと考えられる。そのような社会において、本質的に競争化・階層化社会のなかで機能しうるルーン石碑の意味は、必ずしも大きくなかったと言うことができるかもしれない。

い。

## 《第二セッション》 中世アイスランド語テキストの著者性 (Authorship of Medieval Icelandic Text)

なぜアイスランド人は北欧の王位継承紛争において、王位請求者の主張を支持する記述を残すようになったか？…十二世紀スカンディナヴィア史とノルド語歴史記述の勃興

成川岳大（埼玉大学）

一一三〇年代、スカンディナヴィア三王国（デンマーク、ノルウェー、スウェーデン）においては王位請求者、党派間の抗争が激化し、約一世紀に及ぶ「内乱の時代」を迎えることとなる。アイスランド人と彼らが残した文学作品は、伝統的にこのスカンディナヴィア半島部における政治的動乱からはある程度独立した存在とみなされてきた。同時期アイスランドで勃興した文字文化とこの政治の一大変革期との関係について、本報告では「最古のサガ」と研究者に形容されることもあるエイリーク・オッドソンの『フリュッグヤールスチュッキ』(Hryggjarstykki: c. 1150)成立のコンテキスト、そして同作品と同時代アイスランド人が残した他ジャンルの文学作品との関係性に焦点をあわせて考察する。

『フリュッグヤールスチュッキ』の原本（オリジナル）は現存せず、三大「国王サガ」（『ヘイムスクリングラ』、『モルキンスキンナ』、『ファグルスキンナ』）の引用という間接的な形でのみ知られる。そして、同「サガ」において中心的な位置を占めるのは、マグヌース裸足王（d. 1102）の庶子を称し、異母兄ハーラル（神の僕）王を殺害（一一三六年）して

一時ノルウェーの権力を掌握した、シゲルズ・スレンビ（一一三九年殺害）なる王位請求者である。シゲルズは同作品に加え、スカルド頌詩『シゲルズの歌（Sigurðarbálkr）』においてその死が悼まれたのに加え、複数の史料がその聖性を証言しており、「内乱の時代」のノルウェー政治の中でも特別な位置を占める存在であったと言つてよい。

現存する引用箇所からは、エイリークがシゲルズの事績について、シゲルズの旧臣にとどまらず、最期の場合に居合わせた対立王の従士をはじめ多様な出自の人物から情報を得て執筆を行つていたことがわかる。しかし、生前の両者の関係についてはつきりとした言及は存在せず、むしろ直接的な主従関係になかった可能性さえ存在する。

このエイリークの態度、そして対象を考察する手がかりとして、報告者は十二世紀におけるアイスランド出身スカルド詩人のスカンディナヴィアにおける足跡を対照例として提示した。「内乱の時代」を背景に政治的党派が相次いで形成される中、自らの技芸を資本にスカンディナヴィアの君侯に仕えたアイスランド人スカルド詩人は、人的紐帯で堅く結ばれた家臣というよりむしろ専門職的存在であり、政治的境界を越えた遍歴の中でさまざまな有力者の知遇を得る機会があった。このフットワークの軽さと情報収集能力において、歴史著述家として、エイリークらアイスランド人は半島出身者より恵まれた立場にあった。

スカルド詩人の足跡はさらに、十二世紀アイスランド人を担い手とする文芸活動と半島部との関係が一般に想像される以上に密接であったことを示唆する。ノルウェーだけでなく、デンマークや現スウェーデン有力者の宮廷でも彼らは歓迎され、キリスト教の影響を強く受けた新たな頌詩＝弔いの歌（eridræpa）とて文学ジャンルが新たに誕生していた。

しかし、ならばなぜエイリークは自らの作品を韻文スカルド詩で書き

残そうとはしなかったのだろうか？ 本報告が提示する仮説は、アイスランド人の独占が崩れつつあったスカルド頌詩に代わり、新たな類型の作品の書き手となることで、エイリークがスカンディナヴィアにおいて新たな受容層を開拓しようとしていた、というものである。

このように、「サガ」記述の勃興を考える上では、同時代スカンディナヴィアの状況、あるいは隣接する文学ジャンルとの関係をも射程に入れ研究を行うことが望ましい。

『ヘイムスクリングラ』を書いたのは誰か…作品と著者の複雑な関係

ヨーン・カール・ヘルガソン（アイスランド大学）

スノッリ・ストウルルソン（二四一年没）は、一般にさまざまな作品の著者とみなされてきました。本日組上に載せる『ヘイムスクリングラ』、加えて『エギルのサガ』、さらには『散文エッダ』の序や『ハッタタル（韻律一覧）』といった作品の名が、がその種の作品の候補として挙げられます。しかし、確たる証拠が乏しい中で、中世アイスランド文学に彼が果たした貢献は、実際より過大評価されている可能性があるのではないのでしょうか。本報告は、中世スカンディナヴィア文学における形態の多様性（multiforms）、また「作品」の時間・空間的な広がり（spatiotemporally distributed objects）を示唆する近年の研究動向に着想を得て、そこで重視される「細分された著者（distributed authorship）」という概念で『ヘイムスクリングラ』他の作品に適用できないか試みるものです。言い換えるならば、スノッリをその種の一連の作者「たち」のうち、重要ではあるけれども彼らのうちのあくまでもひとり、とみなすことはできないか、という点が本報告で提示したい内容となります。

スノッリ——あるいは一連の『ヘイムスクリングラ』『著者』の誰で

あれ——は、著者というより、むしろ「編者」、あるいは「清書家 (rewriter)」とみなすべき存在でした。九世紀から十二世紀末に至る、ひとつながりのノルウェー諸王の歴史を構築する編纂作業は、現在であるならば「剽窃」として、あるいは訴訟を招きかねない内実のものです。しかし、口承伝承と「書かれた」文学作品、フィクションとノン・フィクション、オリジナルとコピーといった二項対立の間の区分は、中世においては——そもそも仮にその分別が中世に存在したとしても——ずっとあいまいなものでした。

『ヘイムスクリングラ』内における先行する文献からの直接的な引用は、〈賢者〉セームンドル、そして『フリュッグヤールスチュッキ』からのものがみられますが、それ以外の箇所においても、「編者」は現在失われたものも含むさまざまな先行する語りを取捨選択することでテキストの再構成を行っていました。その結果組み上げられたテキストは重層的な存在であり、その意味においてテキストに単一の「著者」——現代的な意味での——は存在しません。また、再構成の過程におけるテキスト間の関係は非常に複雑であり、下書き状態のものが参照され、他テキストと相互参照しつつ清書される、という過程をたどることもありました。本日は、オーラヴ・トリュグヴァソンの生涯をめぐる「国王サガ」諸テキストの比較検討を通じて、その種の重層的なテキスト生成の過程の一端を示すつもりです。

そのように見ていくならば、スノッリ・ストウルルソンという特定人物と「国王サガ」の一大コレクションとしての『ヘイムスクリングラ』の間の繋がりが希薄であることに加え、テキストそのものが数世代にわたる著述家、「編者」、そして書記が共同作業をする中で成立したものであることが明らかとなるでしょう。その複雑な『ヘイムスクリングラ』の「編纂」作業の中での個人の役割を確定することは、史料が散逸して

しまった今となつては難しいと言わざるをえません。

### 《第三セッション》 記録、記憶、神話 (Record, Memory and Mythology)

アイスランドの「建国神話」…ハーラル美髪王の圧政と植民

松本 涼 (福井県立大学)

ハーラル美髪王は九世紀後半にノルウェー全土を初めて統一した王としてその名を知られている。そしてアイスランドの植民はその美髪王の治世にはじまり、植民者の多くは美髪王の支配に服することを拒否し、新天地を求めてアイスランドに移住したという伝承がある。この伝承はアイスランド人の自由かつ独立不羈の精神を表すエピソードとして人口に膾炙しているが、その内容には問題が多い。まず、九世紀のノルウェーにハーラル美髪王という王が存在したことを伝える同時代の史料はなく、また美髪王のノルウェー統一とアイスランド植民との関連を伝えるのも後世の史料のみなのである。

美髪王にかんする史料を博搜したスヴェッリル・ヤコブソンによれば、九世紀のノルウェーに「ハーラル」という名の王が存在した可能性はあるが、サガなどにみられる「ハーラル美髪王」の事績やイメーজは後世に創られたものである。アイスランド植民との関連については、十二世紀前半の史料に初めて言及されている。ヘルギ・スクーリ・キャルトンソンは『ヘイムスクリングラ』中に現れるハーラル美髪王の圧政の内容、統治制度としてのヤールの配置とオーザル(父系世襲財産)の没収に注目し、それが十一世紀のイングランドの政治制度と類似性をもつことを

指摘した。つまり、この二つの要素は、十一世紀以降にイングランドの状況から着想を得て、美髪王伝承に採り入れられた可能性がある。このように、美髪王伝承は主に十一世紀以降、時代状況に応じてさまざまな要素を採り入れながら形成されたと考えられる。本報告ではこの美髪王伝承を中世ヨーロッパに顕著な「建国神話」の一例として取り上げ、とくにアイスランドの歴史意識のなかで、どのようにアイスランドの植民「建国を説明する「神話」」に発展したのかについて考察する。

はじめに大局を把握するため、「アイスランド人のサガ」と『植民の書』における美髪王伝承のあり方を分析する。どちらのテクストでも、全体の叙述量からすれば美髪王伝承に言及するものは少ないが、植民と美髪王の事績との関連に言及する場合、大半が美髪王と植民者との軋轢に言及していることがわかる。ただし、少数とはいえ美髪王との友好関係に言及するテクストもあり、伝承の多様性が示唆される。ただし、サガの叙述から伝承の受容過程を抽出する方法は、そのクロノロジーの曖昧さや異型、散逸したテクストの存在などを考慮する必要がある、困難である。そのため次に、一事例としてゲイルムンド・ヘリヤルスキンという植民者に注目し、伝承の形成要因について考察をおこなう。ゲイルムンドがノルウェーからアイスランドへ移住した理由については二種類の伝承が残っている。とくに『ストウルルンガ・サガ』（一二〇〇年頃）に含まれる「サーット」においては、著者自身がひとつの伝承に対し反論するため他の伝承を挙げるといふ叙述がみられる。この叙述の背景には、「サーット」の著者がおそらく属するであろう家系の祖がゲイルムンドであるため、その名誉回復のため伝承を書き換えようという意図があったと推察できる。

以上のように、十二〜十三世紀のアイスランドにおいては記憶・伝承をめぐる競合があった。ハールル美髪王と植民の伝承もそのなかで歴史

的に構築されたものである。その伝承の分析を通じて、封建的慣習の浸透や貴族階級の形成といった、ノルウェー王の支配受容を経験する十三世紀以降のアイスランドの社会変化が人々の思考世界に与えた影響について理解する道が——その道はかなり込み入っているけれども——開けるのである。

テッラの息子ブーリとヨルズの息子ソール…北欧神話の大地母神より産まれし神…再訪

伊藤 盡（信州大学）

本発表は、タキトゥスの記録したゲルマニアの始祖神話と、スノッリの残した北欧の始祖神話の対応関係を考察し、さらに、後の北欧神話で「大地の子」と呼ばれる雷神Thorが本来持っていたアイデンティティとキャラクターを想定し、仮説として提示する。

一世紀末から二世紀にかけて、ローマの著述家タキトゥスは『ゲルマニア』を著して、ゲルマン人の民族発生の神話の最も古い形を現代に伝えている。それに依れば、ゲルマン人の始祖は「大地から生まれた神 (deus terra editus)」であるTuisto（あるいはそれに類する名）であり、その神の息子がMannusであって、人間 (Man) の先祖となって、三人の息子（民族の始祖、あるいは三人の神）を生んだことになっている。北欧神話を今に残す大きな役割を担った十三世紀初めのアイスランド人著述家スノッリは『エッダ』を著し、世界の始まりと神々の始まりの伝承を記録した。それに依れば、世界の始まりはYmirという巨人が生まれたとされる。Ymirを乳で育てた雌牛Auðhumlaがなめていた「岩から人間の形をしたものが生まれ」、その名をBuri/Bur/Bor/Boiといい、その息子がBurr/Borrであって、神々の先祖となって、妻を得て三人



の神を生んだことになっている。

これまでの研究では、TuistoとYmirの対応が語源的に関連することが注目を浴びてきた。しかし、神話の構成を考えると、TuistoはBuriとの対応が考慮されるべきであろう。両者に共通点は「大地から生まれた」ことであり、これは本来、ゲルマニアに住んだ民にとって、最も重要な機能・性格付けであったはずである。

しかし、後に北欧神話で「大地の子 (Jafnar buri)」と呼ばれるのは、雷神Dorrである。そう考えるならば、本来、ゲルマン人および北欧人にとって最も重要な、民族の始祖とも呼べる神は、Dorr神だったのではないだろうか。事実、エッダ詩「Trymskvíða」では豊穡神としての役割を雷神Dorrも担っており、豊穡神としての大地の女神の役割がそこに受け継がれたものと考えられる。

(本学准教授)